

2014. 6. 12 (木) 社会学部チャペル

「なぜ『大学生』か？」

古川 彰 社会学部教授

小さい頃、「あなたは何になりたいの」と聞かれた経験があると思います。あるときには、将来何になりたいか絵にしましょうね、などというヒドイ先生もありました。小学校の間ずっと小児喘息で苦しんでいた私になりたかったのは普通の病気でない子供だったので、普通の子供の絵を描いたら、それは今でしょ、将来は？と聞かれてほんとに困って、画用紙の裏面一杯におおきな貝、それも口をあけた貝の絵を描いて、そのころ流行っていた「わたしは貝になりたい」というキャプションまでつけたら、それを見た先生はほんとに貝になってしまったような記憶があります。口を大きく開けた貝を書いた私は「貝になりたい」の意味をまったくわかっていなかったのですが。

何になりたいか？という問いは、かくしてあらゆる子供たちを縛ります。中学生になり、高校生になり、はやく大学生になりたいと試してみなさんは大学生になった。ところが大学生になったみなさんは、まだなにかになった気がしないのではないのでしょうか。卒業して就職して会社員か公務員かなにかに「成りたい」と思っておられる。

この「何かになる」という小さい頃に授けられた問いは、みなさんのというか私たちの人生を強い力で拘束していて、いつも何かになっていない、未達成の自分を再生産し続けています。でも考えて見たら、あの「何になりたいか」という問いにはじまる「なにかに成る」という呪縛はなにかになったからといって解けるようなものではなく、永遠に何かになる、まだなっていないと思いつけて生きることを強いるのではないか。それは辛い。

「あなたは何になりたいの？」という問い自体が、人が生きるという事への大きな誤解に基づいて発せられた問いなのではないか。今日の話の結論を先取りしていえば、おそらく、人の生は何かになることではなく、なにかをすることに意味を見いだすべきではないかとわたし自身は思うのです。

わたしは学生時代、山岳部にはいって山に登っていました。学部はどこですかと聞かれたら山岳部です、としか答えられないくらい学部学生時代は山と山岳部にのめり込んでいました。考えてみると、山登りがどうして面白いのか、本当のところは、よくわかりません。どうして山に登るのですかと聞かれて、おそらく面倒になって、そこに山があるからだ (Because it is there. ) と、マロリーという登山家が答えたという話をみなさんもお聞きになったことがあると思います。この「どうして山に登るのですか」「そこに山があるから」という問いと答えは、「あなたは何になりたいの?」「わたしはよく生きたい (普通でありたい)」という問いと答えに、どこかよく似ている。

山登りには、自然の美しさとか、変化の楽しみ、岩の表面に自分には未知のルートを見つける面白さ、

雪と岩のミックスを乗り越えていく面白さなどなどさまざまな楽しみがあります。たとえば、かつて岩登りは、二人か三人の体をロープで結びあつてのぼっていくものでした。どうしてロープで結ぶのかというと、どちらかが落ちたときにもう一人が落ちた人を止めるためです。岩登りというのは基本的に一人が登って一人がロープを送り出しながら登る人が落ちたときのために支えています。先に登る人は登り終わったら、まずピンを岩の割れ目に打ち込んで自分の体を支え、下の人と繋がれているロープを下の人が落ちたときに支えられるように準備をして、下の人に登ってくるようにいいます。そうすると下の人が登りはじめます。下の方は落ちたときにも上の人が支えてくれるはずで。

だから安全だ、と簡単にいうことは出来ません。ピンがうまく打たれていないとピンが抜けて支えている人と一緒に落ちてしまうこともあります。落ちてしまった人を支えているのはいいけれど、基本的には落ちた人が自力で登ってきてくれないとどうしようもありません。

山岳部にいるあいだに、私はたくさんの友人を山で失いました。2年生の夏に、沢登りの途中で同級生が100メートルほども落ちて一人亡くなり、晩秋には雪崩で5人の仲間を失います。その翌年、久しぶりに山岳部からヒマラヤの未踏峰に登ろうということになってOBを交えて屈強の部員を送り出すことになりました。今日はその話をします。山の中のことは十分にわからないので、架空の話として聞いてください。

彼らは順調にルートを進んで、いよいよ登頂の日、選ばれたのは当初予想されていたKとMの二人でした。すべての人が登ることができるほど調子が良かったらしいのですが、天候が何日持つかわからないので、まずはもっともそのとき状態のいい二人がえらばれるような仕掛けになっているのです。

登山隊は順調に登山を続けてピークまであと数百メートルの場所に最終キャンプをつくり、その二人の隊員が登頂隊員に選ばれます。その二人は翌朝というか夜中に最終キャンプをでて、順調にルートをのぼして行きました。しかし途中から天候が急に悪くなって、登るためにはかなり体力を消耗していました。それでもなんとか頂上にたどり着き、ベースキャンプに登頂を無線で伝え、初登頂を二人で祝ったときには予定の時刻をすぎていました。

短い喜びの時間をピークで過ごした後、これから山を下りますとベースキャンプに連絡して、ふたりは下り始めます。雲が覆っていて、ベースキャンプから彼らの行動は見えません。次ぎに無線連絡があったのは夕刻遅くでした。そのときのKからの連絡は、ベースキャンプを驚かせます。二人はずっとロープで結び合って山を下りていたが、途中でMが滑ってロープにぶら下がり、いまKがそれを支えている、というものでした。

つまりヒマラヤの7000メートルを超える高さで、ロープにぶら下がったMをその上でKが支えている。Kはピンを打ってロープを固定して、Mを助けにいこうとしますが、そこは氷壁になっていて、Mを支えたままでピンを打ち込むことは非常に難しい。なんとか自分を支えるためのピンは打ったけれど、Mを支えているロープを放すとそのピンが抜けてしまう程度にしか氷の中に入っていないというのです。

最初はKからの呼びかけに元気よく応えていたMの声もだんだん弱くなります。夕刻のヒマラヤはまだ明るいものの、気温はどんどん下がってマイナス20度を切ります。次の連絡ではとっぴりと日が暮れてしまい、Kの呼びかけにたいするMの応えもなくなりました。

ベースキャンプにいてKたちに指示をだしている隊長は、救援隊を出すとともに、Kに、Mのぶら下がっているロープをピンでとめてKは明るくなったら下山するように指示を出します。しかし、Kは、今夜一晩、ここでビバーク（臨時露營）をして、翌日明るくなってからもういちど、ピンを打ち直して下においてMを助けることにしたいと申し出ます。隊長の判断ではMを支えたままで一晩超すのは難しいというものでした。そこで再三、KとつながっているロープからKが離れることを要請しますが、Kはそれを拒否します。

その晩、ヒマラヤは荒れました。一晩中交信を続けたいところですが、Kの無線機の電池はそれほど長く持たないという判断もあって、翌早朝の交信でKは弱ってはいるものの、これからピンをうち、Mを助けに行くので、しばらく交信できないことを伝えていきます。下のキャンプからも彼らを救援する別の二人が出発しますが、悪天のために彼らの居る場所まで行くことができません。それから数時間後、Kはピンを打つことができなかつたことを伝えていきます。隊長はそのときも再三、KにMとつながるロープからはなれることを要請しますが、Kはそれを拒否します。それが最後の交信になりました。

その後、天気は回復することなく、彼らの救助を断念した登山隊は、彼ら二人を残して下山を決定します。おそらく二人はロープに繋がれたまま、Kは座ったまま、彼と繋がれたロープの下ではMがぶら下がって、数年はそこにいたことでしょう。ヒマラヤの雪はすこしずつ氷河となって下っていきます。それからちょうど40年経ったいまは、氷河の中をすこしずつ二人して流れ下っていることと思います。

どうして山に登るのですか？と問われてマロリーは「そこに山があるからだ」と面倒になって答えたのではないかと先ほど言いましたが、おそらくそれは山登りという行為の意図、人が「個人」として行為するときの重要な意図を表現しているように思います。しかし、人は一人一人の「個人」とするとともに、共にある、共にしかあり得ないという存在でもあります。そこでは「結ばれてある」ということがとても大切な意味をもっています。その「結ばれ」の中で、ロープを切るか切らないかの判断を、そのときKは迫られ続け、死の恐怖の中で切らないことを選んだのだと思います。

山登りには、ボランティアな精神とその実践が純粋な形で出ているように思えます。そのボランティアで純粋な精神と実践のなかに、何かになるということではなく、何かをするということにこそ私たちは生の意味を見いだせるのではないかと、という人の生のありかたについての問いの答えが端的にでているように思います。

わたし自身も、大学生という束縛なく無償の精神の自由をもつことのできる、そしてこれからの生き方を自由に考えることが出来る時期に、何かになるのではなく、何をしたいのかと考え、実践することの大

切さをこのふたりを初めとする山の仲間と山登りから教えられました。

毎年、ヒマラヤに行くたびに、あの山の向こうの氷河を二人がいまも「結ばれた」ままで、そう、互いが支えあう肉体と無償の精神の姿のままにゆっくりとながれているのだらうと想像してしまうのです。